

2023 年 4 月号

『たんぽぽの秘密』

森乃おと/著
雷鳥社
2020.3 発行
(479/モ)



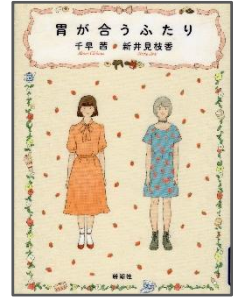
日本で春の花といえば、桜を思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。ですがその桜の足元に咲くタンポポも立派な春の花です。

実は日本は、タンポポの5大産地の一つで、タンポポは一般的にクローンで増えていくのですが、日本では受粉で増えるタンポポが普通に見られたり、珍しい白花のタンポポがあったりと、世界中の研究者から注目されている「タンポポ王国」なのです。この本ではタンポポの様々な種類の写真や解説のほかにも、名前の由来、レシピなどタンポポの情報が余すところなく紹介されています。タンポポの知られざる魅力を発見することができますよ。(K)

2023 年 5 月号

『胃が合うふたり』

千早茜・新井見枝香/著
新潮社
2021.10 発行
(914.6/チ)



新井どんは、書店員で踊り子でエッセイスト。ちはやんは、小説家。ふたりで会くとモーニングの喫茶店からはじまり、息つく間もなく飲食店をはしごする。栗あんみつに栗ぜんざい、磯辺焼きを食べた後、ラクレットの店ではスパークリングで乾杯し、また、移動して、目の前でシェフが自分のために作ってくれたパフェを食べる。好きに食べて、好きに生きて、気にしない。そんなに食べて大丈夫かなと心配になるが、そこは「胃が合うふたり」である。「人は変化していく。友情だって、愛情だって変わるし、相手の気持ちはわからない。・・・けれど、同じものを食べて、おいしいと言い合うその瞬間だけは信じられる気がする。」ふたりの関係と美味しそうな食べ物に羨ましい気持ちでいっぱいになる。(K)

2023 年 6 月号

『愛なき世界』

三浦しをん/著
中央公論新社
2018.9 発行
(F/ミウラ)



牧野富太郎先生の「雑草という名の植物はない」という言葉が聞こえてきそうな、植物への愛にあふれた物語。大学院で日夜研究に励む女性・本村は、シロイヌナズナという草を愛するがあまり、好意を寄せてくれる藤丸（料理人）の思いに応えることができない。一途でまっすぐな藤丸のことは好ましく思いつつも、草に人生を捧げる決心をしているためである。この二人を取り巻く研究室や食堂の人たちもまた、自分の好きなことにひたすら邁進している。皆あまりに楽しそうに、読んでいるこちらまで幸せな気持ちになってくる。誰もが、自分の大好きなことをとことんできたらいいけれど、もし暇やチャンスがなくてなかなか…という人は、こうした物語を読んで、大好きを究める疑似体験をするのもいいかもしれない。読んだ後、道端の小さな草花が愛おしく思えてくる一冊。(S)

2023 年 7 月号

『88歳ひとり暮らしの元氣をつくる台所』

多良美智子/著
すばる舎
2023.3 発行
(596/タ)



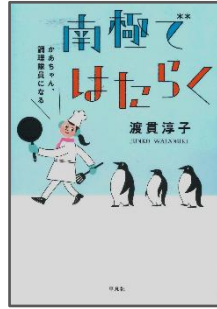
ひとり暮らしの日常を、当時中学3年生のお孫さんが撮影した動画がYouTubeで大ブレイク。あれから3年、今では15万人ものチャンネル登録者がいる著者。そんな彼女のライフスタイルを紹介する本『87歳、古い団地で愉しむひとりの暮らし』(2022.3 発行)に続く第二弾が発行された。本書では、88歳になる現在も団地の4階まで歩いて昇り降りする、元氣の秘訣である食生活について紹介している。

今までの私は老後というと、あまり明るいイメージがなかったけれど、著者の生活そのものを楽しみ、イキイキと暮らす様子を知り、老後に対。するイメージが一新された。いくつになっても生きることを楽しみ続ける、こんなおばあちゃんになりたいと思う。(Y)

2023 年 8 月号

『南極ではたらく』

渡貫淳子/著
平凡社
2019.1 発行
(297/ワ)



もともと料理が好きだった著者は、映画「南極料理人」をきっかけに、南極観測隊の調理隊員になりたいという強い想いを抱きました。家庭を持つ身であることに気が咎めながらも、3度目の挑戦を経て、念願の南極観測隊の調理隊員となります。1年以上も家庭を離れることに対する様々な意見や葛藤で苦しまますが、想いはひとつでした。

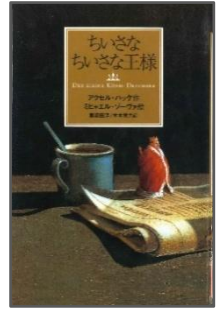
現地での渡貫さんの仕事は、運び込んだ食材のみ補給なしで、毎日 30 人分の食事を作ること。生ごみの排出や排水には制約があり、残して帰国はできません。渡貫さんの作る料理は、エコロジカルでサステナブル！意外なメニューで隊員に大人気でした。

平凡な主婦の料理と生き方を変えた 1 年 4 カ月の南極暮らし。非日常の世界を渡貫さん目線で語られています。(Y)

2023 年 9 月号

『ちいさなちいさな王様』

アクセル・ハッケ/作
ミヒャエル・ゾーバ/絵
那須田淳、木本栄/共訳
講談社
1996.10 発行
(943/ハ)



かなり前から自宅の本棚にひっそりとあった本です。

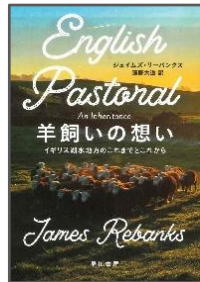
語り手の僕は、落ち込みがちなサラリーマン。そんな僕の家の人差し指サイズの王様（しかもどんどん小さくなります）が現れるようになり、お互いのことを語り合う、という静かなファンタジーです。

この本を買った当時は、挿絵と本の雰囲気惹かれたことが大きく、ストーリーは印象に残りませんでした。ところが今になり読み返してみると、2 人の哲学的な対話から、心に響くところがいくつもみつけられました。時が経ち、語り手の僕に共感できるようになったのかもしれない。(m)

2023 年 10 月号

『羊飼いの想い』

ジェイムズ・リーバンクス/著
濱野大道/訳
早川書房
2023.3 発行
(645/リ)



著者は 1974 年生まれで、オックスフォード大卒の羊飼いです。英国・湖水地方に 600 年以上続く羊飼いの家系に生まれ、祖父から伝統的な農場教育を受けて育つ。しかし、効率重視の現代農業は、地方の小さな農場にも影響を与え、伝統的な家畜や自然との関係を狂わせていく。進歩への違和感を抱く中、著者は、ある農場の土の分析結果や、ある本との出会いをきっかけに、問題に目を向けはじめる。

どうすれば農場が持続可能か。子どもたちに残せるものは何か。祖父や父の想いと共に、著者は問い続け、決断していく。

人々の葛藤と苦悩、代々暮らしてきた土地への想いに、深い共感を覚える。羊飼いの四季を綴った前作『羊飼いの暮らし』と併せておすすめしたい。(Y)

2023 年 11 月号

『いのちの車窓から』

星野 源/著
KADOKAWA
2017.3 発行
(914.6/ホ)



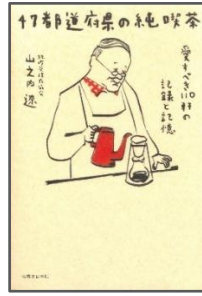
エッセイが好きです。作者の日常や、頭の中を知ることができるだけでなく、文章にも特徴があるので読んでいて面白いです。

今まで読んできたエッセイの中でも本作は特に好きです。数年後結婚することになるガッキーこと新垣結衣さんとのエピソードや、名曲「恋」の歌詞が生まれる瞬間、紅白歌合戦初出場の裏側など盛りだくさんです。華々しい芸能界とは裏腹に、少し闇を感じるところにも親近感が湧きます。2012 年にくも膜下出血という大病を患っている彼だからこそ書けるエッセイもあり、言葉に深みと説得力があります。闘病中のエッセイを記録している前作『蘇える変態』もおすすめです。読み終わる頃には星野源という人間が大好きになっていることでしょう。(h)

2023 年 12 月号

『47 都道府県の純喫茶』

山之内 遼/著
実業之日本社
2020. 6 発行
(673/ヤ)



近年再び注目されだしている純喫茶。実は、お店それぞれに歴史とドラマがあるのです。本書は、純喫茶を愛した著者が1店1店、魂を込めて取材した記録が掲載されています。2013年に初版が刊行。その直後に著者は不慮の事故で帰らぬ人となりました。それから7年経った2020年、著者の遺志を引き継ぎ、オールカラー版として復刊された本書。時を経て、閉店してしまったお店もありますが、著者が大切にしていた「そこにしかない物語」は本書に永久的に記録されています。

読み進めるうちに、それぞれのお店に愛着がわいていきます。福井県の喫茶店も掲載されていますよ。珈琲時間のお供にいかがでしょうか。(s)

2024 年 1 月号

『祖母姫、ロンドンへ行く！』

榎野 道流/著
小学館
2023. 4 発行
(915. 6/フ)

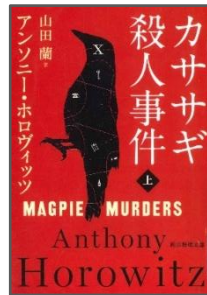


80代の祖母と孫娘の、笑って泣けるロンドン旅行記です。旅が始まると、孫娘は祖母のお姫様のように優雅で頑固な性格と健康面に不安を覚えます。そこで自ら秘書役に徹し、なんとか祖母の要望を叶えようと奮闘するも、あえなく撃沈。手助けしてくれたのは周囲の人々です。特にホテルのバトラーの仕事術は超一流！相手を尊重し、かつエレガントなサポートはお見事だし、思いがけないサプライズもあり感動しました。旅をするうち、孫娘は祖母のことを「厄介な婆さん」から「偉大な人生の先輩」と認識し直すシーンに、心の成長を感じました。ちぎり絵作家・木村セツさんの表紙も必見です！相手のために心を尽くす行動は、美しいと思えた一冊でした。(k)

2024 年 2 月号

『カササギ殺人事件(上)』

アンソニー・ホロウィッツ/著
東京創元社
2018. 9 発行
(H933/ホ/1)



イギリスのある屋敷の家政婦が階段から落ちて亡くなった。一旦は事故死として処理されたが、数日後、同じ屋敷で殺人事件が起こり、名探偵アティカス・ピュントが捜査を始める……というのがアラン・コンウェイ作「カササギ殺人事件」のあらすじです。

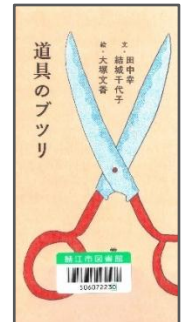
この作品の原稿を読んだ編集者スーザン・ライランドが、足りない原稿を探し回るうちに事件に巻き込まれていきます。上巻はまるまる作中作になっていて、ヒントが隠されているはず！と思って読み進めたのですが、作中作というのを忘れて引き込まれてしまいました。

2019年本屋大賞翻訳小説部門など、多くの賞で1位をとり話題になったミステリです。著者本人による脚本でドラマ化もされています。(m)

2024 年 3 月号

『道具のブツリ』

田中幸・結城千代子/文
雷鳥社
2023. 7 発行
(420/タ)



タイトルが「物理」ではなく、「ブツリ」としているのは、学問としての物理をもっと身近に気軽におしゃれに楽しむことを目的として書いた本だからだそうです。

ここに出てくる道具も、生活道具であるスプーンやハサミ、ホッチキスなど身近なものです。この生活道具とブツリのおもしろい関係を、自然の原理や法則をもとに分かりやすく説明しています。難しい公式はでてこないの、安心して読み進められます。

学生のころ、苦手意識があった理科。もしこの本に出会っていたら、興味を持って勉強できたかなと思います。(s)